二学期第四回確認テスト 国語 8/10 ～ 8/30 (20分) 10/24(月)

第3問 次の文章は、鎌倉時代の歌人源家長の日記の一節である。源家長は、後鳥羽上皇（院）に仕えて、『新古今和歌集』編纂の事務作業に携わった人である。以下は、『新古今和歌集』の中書き（一応の体裁が整った草稿）の完成を祝って、院が競宴（勅撰和歌集完成に際して行われた宴）を開催する場面である。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点 50）

新古今の部類終はりて、この四月に競宴待りき。(ア)心もとなくおぼしめして、まづ中書きばかりにて競宴行はる。去年の神無月の頃より、和歌所に寄人たち召し集めて、昼夜ばかりより日の暮るるまで、或るは書き或るは切り継ぎ、心の暇もなし。すべて、この歌撰らせ給へるまま、まことに毛を吹き疵を求めらる。五人の撰者おのおの撰じあげて後、悉く御覧じ通して、その中にさもあるを御点ありて、左近将監清範書き出だして後、それをまた御覧じて三度まで書き出ださる。まことに人柄の高く下り賤く愚かなるにも依らず、ただ歌の体を先として、なかなか数ならぬ方、山寺の法師ばらなどまで、この道に巧みなるは自ら漏れざるも侍るべし。その五人の撰者別々に御点を書き出だしたるを寄せて、ひとへに部類せられしかば、(イ)さばかりところせげなること侍らず。

すべて二千首に及べるをそこら御覧じあさへさせ給へれば、みなこの歌どもを御心の内に浮かべさせ給へるぞ、さもありがたきまでおぼえさせ給へる。されど、まさしうさほどとは思ひ参らせざりしに、「試みよ」と仰せられて、部類したるを三巻取り出だされて、「上を読め、下をは、みな仰せられん」とて、一巻を引き隠して上を読み侍れば、下は悉くに暗からず。Aこれはことわりなる方も侍る。ただ仮に二三と御覧じたることだに、つゆ忘れさせ給はず。まして度々「撰らせ給ふ」とて善し悪しをおぼしめし分けて、いづれか御心の底にとどまらざるべき。

昔も例なき撰集に侍れば、さりともと思へる歌よみどもの漏れて、思ひ思ひのよすがも尋ね、或るは歌を詠みて添へ、かしこき雪業を尽くして申し文を書き、方々より申しあへるさま、珠に雨の脚よりも繁し。

この頃は、万機の政もさし置かれて、大事とはこの歌の沙汰のみぞ侍る。職事も院司も、「暇有る頃かな」と申しあへる。ある職事の、よにこと無きことの、しかもさせる大事にはあらざるを、繰り懸け申し侍りしに、むつかしげにおぼしめして、「この頃は、かやうのことの耳にも入らぬなり。新古今の部類終はりて、(ウ)耳はあらんずるぞ」と仰せられしがやさしく承りき。

さて部類も終はり方になりたりしに、寄人たちおのおの名残惜しみなどして、老少を分かちて歌詠みて番ひ侍りき。勝ち負けを定むることは、召し寄せて御勅判に及べり。家隆朝臣の「濡れてや鹿の」と、このたび詠みて、やがてこの集に入りて侍り。すべてこの勅撰には、病ある歌などを捨てられず、ただよき歌などを先となせり。かつは、古き跡を訪はるるゆゑなり。家隆朝臣歌に、

B逢ふと見てことぞともなく明けにけりはかなの夢の忘れがたみや

これも病侍り。この外にも、なほや侍らん。覚ゆるばかりを、書き乗せ侍り。

その竟宴、御遊侍りき。御遊終はりて、おのおの和歌を置く。この集に入らぬ人の、竟宴に歌を奉れる、つきしろふ人侍りき。さても、御遊に琵琶のいかにも調べ合はせられざりし、さばかり道に長けたる人の、いかなるものの くるほしにてか侍りけん。御前にて琵琶を弾かるることも度々侍りき。初めたることならばや、臆しても侍るべき。ただごとにはあらじ。その夜のこと、例少なきことなれば、聴聞の人々庭も見えず並み居たる。いかなることと言ひあへりけんな。それに儀して、今は琵琶を取りてだに見ずとこそ承れ。

（『源家長日記』による）

（注）
1 部類――和歌を主題ごとに分類配列する作業。
2 まづ中書きばかりにて竟宴行はる――竟宴は勅撰和歌集が最終的に完成したことを祝って行われるのが通例であるが、今回は後鳥羽院の意向で、中書き完成の段階で行われた。
3 和歌所・寄人――「和歌所」は、勅撰和歌集編纂のために、宮中に臨時に設置された役所。「寄人」は、和歌所で撰歌作業に当たった人。
4 手もたゆく――手も疲れて力が入らなくなるほど。
5 毛を吹き疵を求めらる――後鳥羽院は、毛を吹き分けて小さな傷を探し出すように、厳密な撰歌をなさった。「韓非子」を踏まえた表現。
6 御点――印。または、印を付けること。
7 あざかへさせ給へれば――繰り返して お調べになったので。
8 職事も院司も――「職事」は、蔵人の頭及び蔵人。「院司」は、院に仕えている職員。
9 老少を分かちて歌詠みて番ひ侍りき――年長者と年少者に分けて歌を詠み、その歌を左右一対に組み合わせた。
10 濡れてや鹿の――「下もみぢかつ散る山のタしぐれ濡れてや鹿のひとりなくらむ」（『新古今和歌集』藤原家隆）の一節。
11 病――歌病。歌の表現上の欠点。「逢ふと見て」の歌の病は、「ことぞともなく」と「はかなし」というように、一つの歌の中で「なし」が繰り返し用いられていること。
12 さばかり道に長けたる人――この竟宴の御遊では、藤原公定が琵琶を弾いた。公定は琵琶の名家の出身であった。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 21 － 23 。

(ア) 心もとなくおぼしめして 21

① 院はいつになったら歌集が完成するのかをじれったくお思いになって
② 私たちにはいくら手をかけても歌集の出来が物足りなく思われまして
③ 院は歌集の編纂作業の見通しがついたことをうれしくお思いになって
④ 私たちは歌集の編集作業がなかなか進まないのをもどかしく思いまして
⑤ 撰者たちは歌集の出来がすばらしいことを誇らしくお思いになって

(イ) さばかりところせげなること侍らず 22

① 撰者の意見がこれほどまとまらないことはございませんでした
② 和歌所では家柄によって差別することはございませんでした
③ 和歌所がこれほど窮屈な感じになったことはございませんでした
④ 院が自らの権威を主張なさるようなことはございませんでした
⑤ 撰者がこれほど院にご遠慮申し上げたことはございませんでした

(ウ) 耳はあらんずるぞ 23

① 歌の話を聞く耳を持つ機会はあるかもしれない
② 人々の訴えを聞く耳を持つ暇はないだろうよ
③ 冗談を聞く耳を持つ気持ちはないかもしれないな
④ 無駄な話を聞く耳を持つゆとりはあるだろうよ
⑤ 苦言を聞く耳を持つ余裕はあるのだろうか

問2 波線部a～dの文法的説明の組合せとして正しいものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25 。

① a 完了の助動詞 b 動詞の一部 c 尊敬の助動詞 d 断定の助動詞の一部
② a 動詞の一部 b 完了の助動詞 c 尊敬の助動詞 d 形容動詞の一部
③ a 動詞の一部 b 尊敬の助動詞 c 完了の助動詞 d 断定の助動詞の一部
④ a 完了の助動詞 b 尊敬の助動詞 c 受身の助動詞 d 形容動詞の一部
⑤ a 動詞の一部 b 完了の助動詞 c 受身の助動詞 d 断定の助動詞の一部

問3 傍線部A「これはことわりなる方も侍る」とあるが、この時の筆者の考えを説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 24 。

① 『新古今和歌集』の歌が二千首に達しなかったことに対して、撰歌に当たっては、歌の善し悪しだけでなく、作者の身分や人柄を基準にしたのだから、ある程度少なくなっても当然だろうと考えている。
② 後鳥羽院と撰者たちとが親しく会話を交わす光景に対して、皆が和歌所に集まって一日中『新古今和歌集』に収められる和歌の分類を行っていたから、互いに連帯感が生まれたのは当然だと考えている。
③ 後鳥羽院が『新古今和歌集』の編纂作業に関して撰者の助けを必要としたことに対して、いくら院が和歌に対して見識を持っていても、その能力には限界があるから、当然のことだろうと考えている。
④ 後鳥羽院が『新古今和歌集』の歌を暗唱できることを信じなかった人に対して、自らに対する試験まで行わせて、その事実を証明しようとなさったのは、院の激しい性格ならば当然だろうと考えている。
⑤ 後鳥羽院が『新古今和歌集』の歌をすべて記憶していたことに対して、院はもともと記憶力が優れているのに加えて、撰歌のために何度も歌をご覧になっていたから、当然あることだろうと考えている。

問4 傍線部Bの和歌「逢ふと見てことぞともなく明けにけりはかなの夢の忘れがたみや」は、小野小町の「秋の夜も名のみなりけり逢ふといへばことぞともなく明けぬるものを」（『古今和歌集』）を本歌としている。「逢ふと見て」と「秋の夜も」の歌に関する説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26 。

① 「秋の夜も」の歌は、恋人との出会いを現実のこととしてうたっているが、「逢ふと見て」の歌は、「逢ふ」ことを「見て」と言っていることから分かるように、出会いを夢の中の出来事としてうたっている。
② 「秋の夜も」の歌は、秋の夜は短いのでゆっくりと逢えないと思っていたのに、いざ逢ってみると逆に時間がとても長く感じられたとうたうもので、恋人にやっと逢えたよろこびをうたうものである。
③ 「秋の夜も」の歌の作者として伝えられる小野小町は、平安時代初期を代表する女流歌人の一人で、紀貫之が書いた『古今和歌集』仮名序において、在原業平などと共に六歌仙の一人として称えられている。
④ 「逢ふと見て」の歌の「はかなの夢」は、どんなに鮮明であっても目を覚ますと何も残らない夢のはかなさと、そのはかない夢を通すことによって回想するしかない恋のはかなさとを共に暗示している。
⑤ 「逢ふと見て」の歌で用いられている本歌取りは、有名な古歌の表現を取り入れることによって、表現や情緒に奥行きを与えて、新しい美的世界を作り出す技法で、『新古今和歌集』の時代に流行した。

問5 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 27 。

① 『新古今和歌集』の撰歌に際して、後鳥羽院は、まず撰者たちが選んだ歌を見て、その中で歌集に載せるにふさわしい歌に印を付け、さらにその中からよい歌を選んで印を付けるという作業を、三度まで繰り返しなさった。
② 後鳥羽院が選んだ秀歌について、五人の撰者たちは、歌の内容を重視するかたちで再検討を行い、後鳥羽院が選ばなかった秀歌を付け加えた後に、再び和歌所に集まり、院と協議しながら最終的な分類作業を行った。
③ 後鳥羽院は『新古今和歌集』の編纂作業に熱中して、政務を顧みずに歌のことばかり考えていたので、一人の職事が、院に対して、歌集よりも政務の方が大切であると繰り返し諫言したが、院が聞き入れることはなかった。
④ 『新古今和歌集』の撰歌に際しては、歌の伝統を受け継ぐことを目的としたため、今までの勅撰和歌集にならって歌病を持つ歌は選ばれなかったが、特に表現が優れている歌については、例外として歌集に選ばれた。
⑤ 竟宴の御遊の後に、和歌所に仕えた人たちが和歌を奉ったが、その中で『新古今和歌集』に選ばれなかった人なのに、琵琶が上手であるということだけで、竟宴に参加が許された人がいたことに対して、人々は首を傾げた。

問6 この文章の構成に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 28 。

① 四月に竟宴が開催されたことを冒頭に述べてから、次に和歌所の説明を兼ねて、そのメンバーである後鳥羽院や五人の撰者たちのエピソードや、『新古今和歌集』編纂作業中に起こった出来事を紹介した後、和歌所で行われた二度目の竟宴の様子を描写する構成となっている。
② 四月に中書きの完成を祝う竟宴が行われた後、後鳥羽院の主導で『新古今和歌集』の編纂作業が続行され、最終的な完成間近の和歌所の慌ただしい様子や、完成を祝って開催された歌合わせや竟宴の様子を、時間に沿うかたちで順序立てて描写する構成となっている。
③ 四月に竟宴が開催されたことを冒頭に述べたうえで、いったん過去に戻って、前年の十月以来続いた『新古今和歌集』の編纂作業を時系列に従って回想しながら、和歌に打ち込む後鳥羽院に対して賛美した後、再び竟宴の様子の描写に戻っていく構成となっている。
④ 四月に竟宴が開催されたことを冒頭に述べてから、『新古今和歌集』の編纂作業を思いつくままに回想しながら、政治の不備に目を向けずに和歌に没頭する後鳥羽院の姿勢に対する批判を述べたうえで、最後に失敗に終わった竟宴の様子を描写する構成となっている。
⑤ 四月に竟宴が開催されたことを冒頭に述べたうえで、一度は竟宴が終了したのにもかかわらず、院の意向で編纂作業が続行され、再度竟宴が行われた事情について、院の激しい性格を踏るエピソードも交えながら説明し、後鳥羽院に対する批判を述べる構成となっている。

〈解答欄〉

		コメント	配点
問1	(ア)	21	(5)
	(イ)	22	(5)
	(ウ)	23	(5)
問2		24	(6)
問3		25	(7)
問4		26	(7)
問5		27	(7)
問6		28	(8)

組＿＿ 番号＿＿ 氏名＿＿＿＿＿＿＿＿ 得点＿＿＿＿